

は じ め に

令和元年12月
国立研究開発法人 森林研究・整備機構
森林総合研究所林木育種センター所長 上 練三

令和元年9月に刊行された「森林・林業統計要覧2019」によると、平成29年度立木伐採（主伐）面積はこの5年で2割強も増加しています。人工造林面積の推移においても、要覧に掲載されている平成20年度以降で見ると、増減を繰り返しながら平成26年度まで減少傾向にあったものが、翌27年度には前年度に比べ約4百ha増、以降、増加面積は約19百ha、約32百haとなり、29年度の人工造林面積は久方ぶりに3万ha台に乗ったところです。30年の木材供給量のうち、国内生産量が前年に比べ1.8%増加して3千万m³を超えていることからすると、30年度の人工造林面積も増加しているものと推測されます。

再造林率の議論は別として、伐採面積に連動して人工造林面積も増加しており、種苗生産分野の活発化の必要性はこの推移からも見て取れます。当然のことながら、その最上流部を担う育種センターの業務・役割も高まっており、エリートツリー特定母樹をはじめとする優良種苗の開発・普及に全力を挙げています。

また、平成から令和に改元された本年、令和最初の全国植樹祭で資源循環の大切さを『お言葉』として述べられた天皇陛下が、9月、いばらき国体の総合開会式に御臨席された翌29日、皇后陛下と御一緒に当センターを初めて御視察されました。

両陛下は、エリートツリーの成長の良さに、長きにわたる育種研究の成果を讃えていただきました。また、林木ジーンバンク施設も御覧下さり、種子の長期保存の技術に驚きを持って興味深く御視察されました。当センターの業務を十分に御理解下さったものと考えております。

今後とも、当センターの役割をしっかりと果たすとともに、その成果を現場に届ける、また広くPRする活動を積極的に展開してまいります。

第4期中長期計画の中間年となった平成30年度は、様々な育種研究開発、種苗の配布等に取り組み、次に示すような成果を上げました。

- * スギ等のエリートツリー 82 系統、初期成長及び発根性が優れた第二世代スギ品種等 35 品種を開発。スギ等 33 系統が特定母樹に指定。
- * 現場のニーズが高く、かつ成長が優れた少花粉スギ品種、無花粉スギ品種を関係都県と連携して開発。
- * カラマツ種苗安定供給のための技術開発を普及機関とのコンソーシアム形成により実施し、着花促進等に関する技術普及マニュアルを作成・公表。
- * スギ原種生産用採穂木の増産に資する管穂によるさし木技術を開発。
- * 豊凶間隔の長いブナ種子の超低温保存に適した含水率を解明。
- * コウヨウザン等の早生樹における優良種苗の生産技術の開発を推進。
- * ケニアのメリアに関する着果性及び次代の成長が優れた家系を解明。
- * スギのゲノム編集による遺伝子改変の効率性を最適化する条件を解明。
- * 優良な開発品種等の種苗を計画的に生産するとともに、都道府県等の要望する期間内に約2万本を配布。
- * 開発品種の早期普及を図るため、都道府県等に対し採種園等の造成・改良に関する講習会を開催。

また、「橋渡し」機能の強化に向けた取組みとして、各育種基本区ごとの林木育種連携ネットワーク、北海道、東北、関東、中部等の各地域・組織を跨いだカラマツ育種技術連絡会において、メールマガジンの発行や現地検討会の開催を通じて、育種に関する各種情報の発信・交換を行ったところです。

以上のように、平成30年度の林木育種につきましては、都道府県、森林管理局・署等関係機関の皆様のご協力もいただきながら、一定の成果を上げることができました。

今後とも、林業の成長産業化の実現や花粉症対策、気候変動対応策など様々なニーズに応えるべく、それぞれの地域に根ざした林木育種の更なる発展を目指してまいりますので、引き続き皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。